

C-1 2009 観戦記

～シー・エム・シーの医療オリンピックにかける想い～



2009年10月18日、爽やかな秋空が広がる有楽町、東京国際フォーラムで7回目となる医療オリンピックが開催された。千葉県船橋市に本拠を置く株式会社シー・エム・シー（以下CMC）が主催する医療オリンピック「C-1」は、CMCグループが医療知識と治療技術の向上を目的として毎年行う社内イベントからスタートしたが、次第に社外からも有志が参加し、新聞社やテレビ局も注目する業界でも有数の大イベントに発展した。「C-1」とはどのようなイベントなのか、そして、「C-1」にかけるCMCの想いとはどのようなものか。大いに盛り上がった「C-1 2009」をやわらセラピー推進プロジェクトが取材した。

C-1主催者サイト

CMCグループ
www.cmc-g.jp

CMCグループ求人サイト
www.cmc-seikotsu.com



臨床事例に基づく 学術発表

コンテストに先立って、2つのテーマの学術発表が行われた。ひとつめのテーマは「踵骨骨端炎の治療判定について」で、東陽中央整骨院の田川雄士院長が、院内でのいくつかの臨床事例を解説して、治療判定についての見解を披露した。臨床事例は患者さんの症状、治療方法、経過と結果が詳細に説明されており、説得力のある結論が導き出されていた。ふたつめは「鼻炎の鍼治療について」をテーマに、北千住中央整骨院の鈴木優院長より発表された。やはり実際の臨床事例に基づくプレゼンテーションであり、良好な治療結果が結論の説得力を表していた。両者とも一定期間の臨床結果の検証が説明の主体となっている点で意義深く、発表後に実際の質疑問答が繰り広げられていたことから、たいへん有意義な学術発表であったといえるだろう。



「鼻炎の鍼治療について」を発表した
北千住中央整骨院の鈴木優院長

「踵骨骨端炎の治療判定について」を発表した
東陽中央整骨院の田川雄士院長

医療知識と治療 テクニクを競う

「医療オリンピック」と名づけられていることから、医療知識や治療テクニクを競うコンテストがこのイベントの主体といえるだろう。コンテストの内容は、幅広い分野の医療知識の確かさを競う「医識王コンテスト」、鍼打ちの速さと正確さを競う「刺鍼王コンテスト」、そしていかに早くきれいで実用的に包帯を巻けるかを競う「包帯王コンテスト」の3つ。どのコンテストも普段の仕事の実力を競うもので、会場は大変な盛り上がりだった。「医識王コンテスト」は会場で参加者全員による予選が行われた。問題は〇×形式50問で、柔整・鍼灸とは異なる分野からも出題され、かなり難易度が高いと思われるものも含まれていた。解答用紙を集計後、成績優秀者のベスト10が発表されたが、最高得点者はなんと41問正解！上位5人によるステージ上での早押しクイズ形式の決勝戦の結果、市川真間整骨院の矢部仁章院長が圧倒的な強さで「医識王」の栄冠を手にした。



「**医識王**」 市川真間整骨院 矢部仁章院長

「刺鍼王コンテスト」は、1分間に一寸三分と、一寸六分の鍼を何回打てるかを競うもので、部位に見立てたカウンターに正確に鍼を打ち、それを抜いてセットし、また打つという素早い手さばきと集中力が要求される。ステージでは事前の予選を勝ち抜いた12名による準決勝を経て、上位4名が決勝に進出。息詰まる接戦の末、西船中央整骨院の金田翔夢さんが前年の覇者を僅差で破り、見事「刺鍼王」に輝いた。



「**刺鍼王**」 西船中央整骨院 金田翔夢さん

「包帯王コンテスト」も事前に予選が行われ、会場では16名による準々決勝から行われた。コンテスト内容は左足関節に包帯を巻くもので、時間・見栄え・きつさ・実用性が審査のポイントとなる。30秒以上経過すると失格となるだけに、少しの狂いも許されないという緊張感がみなぎっていた。続いて上位8名による右足関節を対象とする準決勝が行われ、4名が決勝に勝ち進んだ。決勝戦は左右の足関節、右膝、右手第二指、右肩関節の5部位を対象に技が競われ、

武蔵境中央整骨院の小川芳明さんが「包帯王」の称号を勝ち取った。



「**包帯王**」 武蔵境中央整骨院 小川芳明さん



「**医識王コンテスト**」決勝



「**刺鍼王コンテスト**」決勝



「**包帯王コンテスト**」決勝

『C-12009』を 観戦して

イベントの最後に、主催者であるCMCグループ代表取締役の近藤昌之社主から挨拶があり、「医療家には、幅広く深い医療知識、治療技術、そして豊かな人間性が不可欠」と総括した。なるほど、C-1というのには、医療家として必要不可欠な要素のコンテストであり、日々の努力と成長を確認しあい、称え合う舞台であり、近藤社主の医療家に対する想いが凝縮されたイベントなのである。特筆すべきは、イベントを支えるCMCスタッフの真剣さである。コンテストに参加する競技者でさえも、イベントの進行や準備に関わり、誰に指示されるわけでもなく、実にきびきびと働いていた。スタッフ一人ひとりの充実感に満ちた表情から、CMCグループのC-1にかける想いの強さが伝わってくる。CMCグループの理念、企業風土の素晴らしさ、そしてそこで働くスタッフたちの充実感を存分に感じた。C-1であった。「C-12010」も大いに盛り上がり、たくさんの方のドラマが生まれるだろう。



閉会の挨拶をする
CMC代表取締役 近藤昌之社主